

2024年9月22日 主日礼拝 聖霊降臨節 第19主日 召天者記念礼拝

説教題：「永遠の命に至る」

聖書箇所：ヨハネによる福音書6章22 - 33節 (175頁)

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 51 交読詩編：詩編95編1 - 11節 (105頁)

讚美歌：83/11 (感謝に満ちて) 57 (ガリラヤの風かおる丘で) /111 (信じて仰ぎ見る) /27

「今週の聖句」〔朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。

父である神が、人の子を認証されたからである。〕 (ヨハネ伝6：27)

「牧師室の窓」 「在りし日の姿思いて懐かしき涙浮かびてふと声掛ける」

「かの人ふとしたことで主に出会い一步一步を大切にせし」

(1)皆様お早うございます。長かった夏も漸く収まりつつあり、本日の召天者記念礼拝に共に集まることが出来ましたことを主なる神に感謝いたします。今日は講壇の後ろの扉が開かれています。

お写真を拝見しながら、召天者の方々のお姿を思い起こし、礼拝の時を過ごして参りましょう。ご存命の時からは既に幾年かを、幾十年かを経過しております。彼の日のことを、ふと思い出し、新鮮な思いへと変化して参ります。歳月を経ることによって、懐かしい思い出がより深く残っていることでしょう。

私事ですが、私の家では4代前までの位牌と共に、父母の写真を置き、朝な夕なに感謝の挨拶をしております。子どもたちや孫たちが来た時には先祖の皆様への挨拶をしています。先の戦争で18歳の若さで亡くなった叔父の写真も置いてあります。赤道を越えた南太平洋海戦で戦死しました。5年前に私は政府の担当者と共に飛行機と船とを乗り継いで訪れ、花を手向けて参りました。戦争の悲劇を目の当たりにしてきました。

(2)本日の聖書箇所は22節から始まります。その22節には「湖(ミズウミ)」と書かれています。「湖」とはガリラヤ湖のことです。ガリラヤ湖はイエス・キリストがお育ちになられたガリラヤ地方にあります。ガリラヤ地方は、北緯33度にあり、日本の宮崎市や熊本市とほぼ同じ緯度にあります。緑豊かな土地で、春にはアーモンドの花が咲き、桜吹雪の様になります。地中海から吹いてくる風が雲となり雨を降させます。ガリラヤ湖は面積が日本の琵琶湖の約1/4 (四分の一) の大きさです。湖の周囲の長さは約53km、東京の山手線1周の長さは35kmですから、1.5倍です。湖の長さは南北に21km、東西に13kmあります。山手線の1周よりも一回り大きい面積の湖と考えれば分かり易いと思います。イエス様はガリラヤ湖の周辺で人々に神の国について話をされ始めました。サマリア地方でも、都であるエルサレムでも人々に向かって神の国について話をされました。サマリアの町では喉が渴いたので、水を汲む井戸の傍で座っていました。旅に疲れ、日差しが強い12時の頃でした。ちょうどそこにサマリアの女性が水を汲みに来ました。サマリア人はユダヤ人から見れば外国人であり、歴史的には犬猿の仲でありました。併し、そのサマリアの女性に水を求めたイエス様は、「渴くことがない永遠の命に至る水がわき出る」ことを伝えたのです。現代の私たちは水道の蛇口をひねれば水を飲むことが出来当たり前ですが、私が子供の頃は祖父母が住む農村では水道がなく井戸水の生活でした。井戸水を汲み上げるためには手間が掛かりました。コップ1杯の水を大切にします。子供心にも、水道水での生活と井戸水での生活との違いを体験しました。私が15年前に神学校の学生時代にフィリピンの南の島ネグロス島で農村や漁村の生活体験に行った時も人々は井戸水生活でした。…ところで、イエス様の時代や旧約聖書の時代に、井戸一つで何人の人々が生活していたのかという考古学的研究があります。それによりますと、場所や地下水の状況にもよりますが、井戸一つで、人口3百人~5百人が生きることが出

来たかと推測されています。水を大切にしていたのです。従って、イエス様が話された「渴くことがない永遠の命に至る水がわき出る」ことについてサマリアの女性が強く興味を持って反応したことは成程と頷けるのです。この話は2千年前の話ではあっても、現代に生きる私たちにとっても生活の苦しさや心の渇きを癒すこととして受け取ることが出来ます。

(3)今日の聖書箇所に戻りましょう。6章の27節です。〔(6:27)朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。〕食べ物の話は私にはつらい思い出が沢山あります。小学校の同級生の家が肉屋であり、コロッケなどの揚げ物を売るお店でした。コロッケ1個が5円、そのコロッケ一つを食べることが私の夢でした。また、学生時代の一人住まいでは、空腹と仲良しでした。90円の定食を週3回までは食べることが出来ましたが、ワンランク上の110円の定食を食べることが夢でした。大学の授業料が年間で1万2千円の頃です。早く卒業し、収入を得なくてはと思いつつ勉学に励みました。

学生時代に聖書を初めて読みました時に、「朽ちる食べ物・永遠の命に至る食べ物」って何だろうと興味がありました。そんなものがある筈がない。そう思いつつも心が引かれていきました。

(4)今日の召天者記念礼拝での召天者の皆様は何らかのきっかけがあって聖書の御言葉に導かれたのではないのでしょうか。そしてこの教会に召天者としてお名前が記されているのです。今日の週報の2頁にお名前と召天日が載っています。最初に記されているお名前は〇〇さんです。1950年(昭和25年)に召天されたました。お生まれの年は存じ上げませんが、39歳以上のご寿命であれば明治時代のお生まれです。ここに記されたお名前の方々は、明治・大正・昭和の時代にこの世に生を受けられて人生を歩まれてこられました。1つの事例として、今年2024年ですから100年前は西暦1924年(大正13年)です。どんな時代かと言いますと、1923年(大正13年)が関東大震災の年。1925年(大正14年)にラジオ放送が開始。現在私たちがスマートフォンを使っているのと比較すると時代の変化が明白です。同じ年に衆議院議員選挙で男子の普通選挙が実現された年。時代は大正デモクラシーと女性によるバスの車掌が職業として定着しつつある頃でした。併し乍ら、1929年(昭和4年)のアメリカでの株式暴落に端を発して世界経済は混迷の時代に入り、日本の農村では飢餓状態となり、人身売買が行なわれました。1931年(昭和6年)9月18日に満州事変が始まり、アジア太平洋戦争への15年間の戦争の始まりとなりました。その長い期間を、そして、終戦後の塗炭の苦しみの生活の中を、ここにお名前を書かれている召天者の多くの方々は生きてこられました。

召天者の方々は、様々な社会情勢・激動の中で、或いは、ほっと息をつく時に、聖書の御言葉に出会い、励まされて、生きてこられたことでしょう。或いは、召天後の日々の中で、教会での篤い祈りに支えられて、天の国に居られるのです。教会ではこの世での生活を終えたならば、天の国の住人となることを伝えています。

(5)先程の27節に書かれている御言葉をもう一度見てみましょう。〔(6:27)朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。〕この御言葉を「食べ物」に力点を置いて読みますと、そのような食べ物など有る筈がないと私たちは即座に否定してしまうでしょう。併し、「永遠の命に至る…ために働きなさい」この言葉に力点を置くと何となく分かるような気がしませんか。特に「働きなさい」を「生きてみなさい、生きるのです」と言い換えれば、応援団から、応援されている様に聞こえてきませんか。何故ならば、目標に向かって生きようとすることは人間としての生まれながらの資質であるからです。十数万年前に人類はアフリカ大陸を出て、生きるために世界の隅々へと広がってきました。

私の住んでいる近くのお寺さんにはガラス戸の掲示板があり張り紙がしてあります。そこには「過去無量のいのちを受け継いで自分の番を生きている」と書かれています。この言葉には自分の命を精一杯に生きることの後押ししている、応援しているように思われます。別の言葉に言い換えますと、物事を自分勝手に決めてはならないのです。自分の命を精一杯に生きることが永遠の命に繋がるのです。先週の「読書と祈りの礼拝」の時に紹介しましたが、今年9月1日日曜日の朝日新聞の「朝日歌壇」に載っていた「死の姿を孫に見せることが私の最後の仕事」の歌です。その短歌を読んだ人が、9月8日の朝日新聞「声」の欄に、「人生の最後の仕事」と題して59歳の女性の投書が載っていました。

この週報にお名前が書かれた方々は夫々に「人生の最後の仕事」を黙々と続け、それをなさってこられたのでしょう。事柄の大小ではありません。誠実なひたむきな生き方であります。…27節の後半には「父である神が、人の子を認証されたからである」に書かれている「認証された」とは「太鼓判を押された、保証された」という意味です。私は長い信徒の職業人時代に、保証という言葉大切にしてきました。人物が保証される事ほど名誉なことはありません。約束を守る、信頼を裏切らない、約束を破れば、その人はその職業では生きて行くことが出来ません。法律経済用語で、会社が社債を発行する時に契約の中にある「財務制限条項」を「誓約(英語で covenants コバツ)」と言います。この言葉は聖書の言葉なのです。併し、法律を学んだ人が法律を守らない事態がこの国でも報道されています。法律を学び、「(聖書の)律法」を学ぶことが不可欠と私は思います。

(6) 続く28節29節を見てみましょう。{(6:28)そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、/(6:29)イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業(ワザ)である。」} 人々はイエス様に質問をします。「神の業(ワザ)を行うためには、何をしたらよいでしょうか」つまり、手っ取り早い“答え”が欲しいのです。イエス様は何とお答えになられましたでしょうか。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業(ワザ)である」ここに書かれている「神の業(ワザ)」とは「神の仕事・任務・職務」という意味です。つまり、神さまは私たちを支援してくれる、サポートして下さるのです。最後に、私はスポーツでは弓道(和弓)をしております。弓を引く時には右手にグローブのような手袋をします。この手袋の名前は「躰(カ)またはカケ」と言います。この躰がなくては弓を引くことが出来ません。ですから、世の中では無くならぬもののことを「掛け(カ)がえのない」「掛け(カ)がえのない命」などと言っています。また、矢の一番後ろの部分を「筈(ハズ)」と言います。筈がないと弦(ツル)に矢を番(ツガ)えることことが出来ず、従って、飛ばすことが出来ません。ですから、世の中では、予想もしない程にがっかりしたことを「そんな筈(ハズ)がない」と言います。

…召天者の皆様には、夫々の人生の中で「掛け(カ)がえのない」御言葉に出会い、この世の人生を歩まれて、今は神の国、天の国におられるのです。私たちも何時(いつ)の日にか、天の国に召されるのです。その日その時まで御言葉と共に生きる人生を過ごそうではありませんか。

・・・お祈りいたします。

本日は天に召された方々と共に礼拝のひと時を与えられたことに感謝いたします。瞼(マブタ)の奥に召された方々を思い浮べる機会を与えられました。その人生の曲がり角に、或いは、進み行く日々の中に、主なる神のお支えと励ましとがあったことと思います。私たちがここに集うことが出来ることに感謝いたします。ご遺族の一人一人を、これからの人生の夫々の場面でお支え下さいませにお願いいたします。 イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

〔**新共同訳**ヨハネによる福音書(6:22)その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。/(6:23)ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。/(6:24)群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。/(6:25)そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。/(6:26)イエスは答えて言われた。「はつきりしておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。/(6:27)朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」/(6:28)そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、/(6:29)イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」/(6:30)そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるよう、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。/(6:31)わたしたちの先祖は、荒野でマナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」/(6:32)すると、イエスは言われた。「はつきりしておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。/(6:33)神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。』〕

〔**聖書協会共同訳**ヨハネによる福音書(6:22)その翌日、湖の向こう岸に立っていた群衆は、小舟が一そうしかそこになかったこと、また、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気付いた。/(6:23)ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所に近づいて来た。/(6:24)群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜してカファルナウムに来た。/(6:25)そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「先生、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。/(6:26)イエスは答えて言われた。「よくよくしておく。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。/(6:27)朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父なる神が、人の子を認証されたからである。」/(6:28)そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、/(6:29)イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」/(6:30)彼らは言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じることができるよう、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。/(6:31)私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」/(6:32)すると、イエスは言われた。「よくよくしておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではない。私の父が天からのまことのパンをお与えになる。/(6:33)神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。』〕

〔**口語訳**ヨハネによる福音書(6:22) その翌日、海の向こう岸に立っていた群衆は、そこに小舟が一そうしかなく、またイエスは弟子たちと一緒に小舟にお乗りにならず、ただ弟子たちだけが船出したのを見た。/(6:23) しかし、数そうの小舟がテベリヤからきて、主が感謝されたのちパンを人々に食べさせた場所に近づいた。/(6:24) 群衆は、イエスも弟子たちもそこにはいないと知って、それらの小舟に乗り、イエスをたずねてカペナウムに行った。/(6:25) そして、海の向こう岸でイエスに出会ったので言った、「先生、いつ、ここにおいでになったのですか」。/(6:26) イエスは答えて言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたがわたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである。/(6:27) 朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」。/(6:28) そこで、彼らはイエスに言った、「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」。/(6:29) イエスは彼らに答えて言われた、「神がつかわされた者を信じるのが、神のわざである」。/(6:30) 彼らはイエスに言った、「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか。どんなことをして下さいますか。/(6:31) わたしたちの先祖は荒野でマナを食べました。それは『天よりのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」。/(6:32) そこでイエスは彼らに言われた、「よくよく言うておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない。天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである。/(6:33) 神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである。〕